

# 大正の大衆児童文学史論

上 田 信 道

**要 旨** 日本の児童文学は大正期に芸術児童文学と大衆児童文学に画然と分離し、殆ど相互に関係を結ばないまま独自の道を進むことになる。これがいわゆる児童文学の〈複線化〉現象であるが、これまで大衆児童文学の通史について論じられることはなかった。本稿では大正期における大衆児童文学の成立から終焉までを概観し、その特質について論じる。

## Abstract

The Japanese children's literature split up into art children's literature and popular children's literature in the Taisho Period. These two literatures set off their own path almost independently of each other. This is the so-called "double-track phenomenon" of the children's literature. However, the general history of the popular children's literature has never been treated. In this paper, the author overviews the popular children's literature in the Taisho Period from the establishment to the demise and discusses its characteristics.

## 1. 児童文学の〈複線化〉現象

明治末から大正初めにかけて、日本は半封建的な遺制を残しながらも、近代的な資本主義国家としての社会的・経済的な基盤を急速に整えていった。

とりわけ、1915（大4）年に勃発した第一次大戦は、主戦場である欧州から遠く離れたこの島嶼国家に、空前の戦争景気をもたらす。経常収支は慢性的な赤字を脱し、開戦の年から5年間は大幅な黒字となって、債務国から債権国に転じた。経済成長率は年率30%を越す勢いであった。

こうした急激な経済発展にともなって、エリートサラリーマンが大量に生まれ、都市中間層を形成した。彼らの多くは鉄道会社によって新しく開発された郊外の新興住宅地（ベッドタウン）に居住し、欧風の華やかな文化に憧れながら、安定した収入をもとに豊かな消費生活を送った。また、彼らは明治期にほぼ確立した近代的な高等教育を受け、欧米の新知識を身につけた世代の人びとでもあった。こうした都市中間層から支持された自由主義的な子ども観・教育観は、大正デモクラシーの時流に乗り、この時代に大いに興隆するのである。

折しも、巖谷小波に代表される〈お伽噺〉は時代

の使命を終え、これに取って代わる新たな児童読物の創出が待望されていた。ほどなく、こうした時流にのって、文壇作家を著者に起用した創作児童文学のシリーズ「愛子叢書」全5冊<sup>1</sup>や、〈世界家庭文学の古典全書〉を標榜した豪華本シリーズ「模範家庭文庫」全25冊<sup>2</sup>が刊行される。

別けても、鈴木三重吉による雑誌「赤い鳥」<sup>3</sup>の成功は、この時代の潮流のひとつを決定づける出来事であった。三重吉の成功に刺激されて、「おとぎの世界」<sup>4</sup>「こども雑誌」<sup>5</sup>「金の船」<sup>6</sup>「童話」<sup>7</sup>など、芸術児童文学の雑誌の創刊が相次ぎ、空前の童話・童謡ブームともいえるべき現象を招来する。

ほかに、教育思想家の羽仁もと子を中心にして創刊された月刊絵雑誌「子供之友」<sup>8</sup>は、キリスト教の理念に基づいて子どもの自立と人間形成をめざすユニークな編集方針をとった。童謡と童画を中心に誌面を構成した幼児・低学年対象の「コドモノクニ」<sup>9</sup>は、厚手の紙を使用した四六倍判の大型雑誌で、オフセット印刷の技術を採用した。ただ、1冊の価格が50銭であり、「子供之友」などに比べてもかなり高価であったうえ、内容も都会的・小市民的な色彩の濃いものであった。そのため、購読者は一部の富裕層に限られており、芸術児童文学の興隆期に咲いたあだ花とも言える雑誌であった。

ところが、奇しくも「赤い鳥」が創刊された1918（大7）年のことである。4年の長きにわたって戦われた第一次大戦が終結の時をむかえると、日本は一転して大不況に陥った。追い打ちをかけるような、1923（大12）年9月の関東大震災である。労働争議も頻発して、社会矛盾が増大する。

こうした社会状況を反映して、童心に照らしながら社会の矛盾を象徴的に表現する童話も生まれるようになった。

未明の反戦童話「野薔薇」<sup>10</sup>や、圧政への抗議と自由を渴望する寓意を込めた雨雀の「白鳥の国」<sup>11</sup>や、階級闘争を象徴的な手法で暗示する江口渕の「蛇の頭と尻尾」<sup>12</sup>などが書かれた。有島武郎の「一房の葡萄」<sup>13</sup>のように、人間の心の奥底にあるエゴと良心の問題や子どもの負の心性をえぐりだした名作なども著された。大正の終わり頃には、ナンセンスと風刺精神にあふれる宮沢賢治「どんぐりと山猫」<sup>14</sup>や、子どもの姿を生き活きとリアルに描いた千葉省三「虎ちゃんの日記」<sup>15</sup>など、昭和期の児童文学につながる新しい傾向の読物も登場し始めた。

夏目漱石の門下であった三重吉は、文壇におけるコネクションをフルに活用し、多くの文壇作家に童話・童謡の寄稿を依頼した。「赤い鳥」各号の冒頭に掲げられた「赤い鳥」の標榜語<sup>モットー</sup>によると、「世俗的な下卑た子供の読みものを排除して、子供の純性を保全開発するために、現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め、兼て、若き子供のための作家の出現を迎える、一大区劃的運動の先駆である」とある。

また、「赤い鳥」を通じて三重吉の盟友となった北原白秋は、これまで学校教育の場で教えられ歌われてきた唱歌は子どもとその生活を知らず、在来のわらべ歌の伝統を無視したものであった、という趣旨の手厳しい批判を加え、詩としての芸術性を重んじる童謡の創作を始めている。

ここで、1918（大7）年の「赤い鳥」創刊号<sup>16</sup>に目を向けてみよう。

清水良雄の表紙絵、北原白秋「栗鼠、栗鼠、小栗鼠」、島崎藤村「二人の兄弟」、芥川龍之介「蜘蛛の糸」、鈴木三重吉「ぼっぽのお手帳」、泉鏡花「あの紫は」、徳田秋声「手づま使」などの顔ぶれと作品が綺羅星の如く並んでいる。

しかし、これら「赤い鳥」に読物の原稿を寄せた（現代第一流の芸術家）たちは、これまで子どもむけの読物に筆を染めたことのない文壇作家によって、そのほとんどが占められていた。そのため、童話の創

作は余技的な仕事と受け止められがちであった。寄稿される物語も昔話の再話や外国の翻訳・翻案ものが中心になっていく。

さらに、「赤い鳥」の標榜語にいう〈子供の純性〉とは、童心主義的な児童観の発露であった。童心とは、純真で汚れのない心で、大人にも子どもにも存在する理想主義的な心性を意味している。要するに、童話や童謡とは、実在する子どもにむけて書くのではなく、童心という理想主義的な存在にむけて書く文芸であった。

秋田雨雀は、童話とは人類の持つ「永遠の子供」<sup>17</sup>にむけて書く芸術である、と述べている。さらに、小川未明にいたっては、自らの童話を「わが特異な詩形」<sup>18</sup>と呼び、「むしろ、大人に読んでもらつた方が却つて、意の存するところが分る」<sup>19</sup>とまで述べている。こうして、童心主義の童話や童謡は高踏的な芸術主義に偏って、現実の子どもの姿や心性から遊離していることは否めない。

有名作家の名を借りた代作のあることや、三重吉が変名で執筆した物語の多いこと、寄稿された作家の原稿に三重吉が無断で筆を入れていたことも、また、事実である。

何よりも、「赤い鳥」を中心とする新たな芸術運動は、概ね比較的富裕な都市中間層をターゲットとした運動であった。言い換えれば、少数のエリートの家庭のための運動であり、発行部数も「赤い鳥」の最盛期ですら1万部程度に限られていた、といわれる。

また、「赤い鳥」を発行した赤い鳥社は鈴木三重吉の個人経営であったし、「金の船」を発行したキンツノ社も新しい子どもむけ読物の創出に志を抱いた篤志家の斎藤佐次郎による個人経営であった。その他の芸術児童文学の雑誌も、小資本の出版社による経営であったことに変わりはない。大資本を背景に大量発行された大衆児童文学の雑誌とは、大きく異なっている。発行部数の多少が必ずしも社会に与える影響の大小に比例するものではない。とはいえ、こうした個人の篤志への過度の依存や経営母体の脆弱さこそが、芸術児童文学の大きな弱点であった。

「赤い鳥」の創刊に先立って配布された「童謡と童話最初の文学的運動」と題する宣伝チラシにおいて、三重吉は既成の子どもむけ読物を「功利とセイセイシヨナルな刺戟と変な哀傷とに充ちた下品なもの」と酷評し、「日本人は哀れにも未だ嘗て、たゞの一人も子供のための芸術家を持つたことがありませ

ん」と断じているが、三重吉をして〈俗悪〉〈下劣〉とまで言わしめた読物こそが、大衆児童文学の諸作品であった。以後、日本の児童文学は芸術児童文学と大衆児童文学に画然と分離することになった。ふたつの系統は殆ど相互に関係を結ばないまま、独自の道を進むことになっていく。いわゆる児童文学の〈複線化〉現象である。

これに関連して想起されることは、佐藤忠男の評論「少年の理想主義」<sup>20</sup>である。

佐藤は「大正の末年から日中戦争のころにかけて、事実上日本の児童文学の主流は『少年倶楽部』にあった。にもかかわらず、現在発表されている大多数の児童文学史、児童文学論は、この『少年倶楽部』をほとんど問題意識の外にはねとばすことで共通のパターンをもっており、それには一応の理由と主張があるにしても、やはりはっきりと欺瞞的である」と断じている。

しかし、発行部数の多い雑誌がつねに〈主流〉たりうるのか、という点において佐藤の論理には疑義を感じざるをえない。

また、佐藤の論理に拠って児童文学史を記述するにしても、全盛期の「少年倶楽部」が日本の児童文学の〈主流〉であったならば、それより前に他を圧倒する発行部数を誇った「日本少年」は、なぜ〈主流〉たりえなかったのであろうか。こうした「日本少年」を意識の外にはねとばすことも、はっきりと欺瞞的ではないのだろうか。

もとより、本稿の立場は芸術児童文学を過小に評価するものではない。かといって、過大に評価するものではない。大衆児童文学についてもまた然り、である。

なお、元号としての大正時代はわずか15年間にすぎないが、本稿にいう文学史上の時代区分としての〈大正〉は、明治末から昭和始めにかけての時期にあたる。厳密には〈大正期〉と記すべきであるが、煩雑さを避けるため特に差し支えない限り〈大正〉とのみ記した。

## 2. 大衆児童雑誌におけるビジネスモデルの原型

大衆児童文学の成立時期は芸術児童文学よりやや早く、ほぼ明治末のことであった。

これより先、児童文学の草創期の児童雑誌には、確固たる理念をもった主宰者があった。「少年園」<sup>21</sup>の山縣悌三郎は編集者と主要な執筆者と経営者を兼ねていたし、「小国民」<sup>22</sup>の石井研堂は経営者が雑

誌の内容に口出しすることはなく、雑誌の編集と執筆に専念できたという。

ここでは、まず、「小国民」に目を向けてみたい。この雑誌はまだ児童雑誌が大衆児童雑誌と芸術児童雑誌に分化する以前の未分化の状態の総合児童雑誌であったが、大正の大衆児童文学雑誌におけるビジネスモデルの原型を確立したからである。

創刊当初の発行人は、高橋省三であった。木村小舟の『少年文学史 明治篇』上巻<sup>23</sup>によると、岐阜県出身で一時は「少年園」誌の発行元であった少年園の営業部に勤務したこともあったらしい。独立して出版社の学齢館を興すと、石井研堂が正式な主筆に就任する前から、彼をして実質上の主筆の任にあたらしめたようだ。読者対象は概ね小学生（当時は4年制）で、これまでに他誌が対象としたことのない低い年齢層の子どもをターゲットにしている。

創刊号<sup>24</sup>は初版2,500部を売り尽し、直ちに再版を出した。第1年第4号<sup>25</sup>には「今や已に八千余部を刷り出すほどの勢に相成候に付」云々、第3年第1号<sup>26</sup>の「館告」には「小国民は、すでに、小学雑誌の王位を棄て日本諸雑誌の王位を占むるに至れり」云々、第3年第2号<sup>27</sup>には「今は三万に垂とする」云々、第4年第18号<sup>28</sup>には「十万余部」という記述までである。

宣伝のための誇張があることは割り引くにしても、当時としては驚異的な発行部数である。後年、研堂が回想<sup>29</sup>するところによれば、この雑誌の最盛期は日清戦争中で、発行部数は15,000部であったという。このあたりが平均的な実売部数だろうか。かくして、児童雑誌の大量発行時代の幕が切って落とされた。

さらに、最先端の印刷技術を取り入れながら、他誌に例を見ない大量の口絵・挿画・図版を掲載して、費用を惜しまなかった。第2年第8号<sup>30</sup>からは西洋木口版の技術を導入し、第3年第15号<sup>31</sup>には早くも写真銅版（網目版）の技術を導入している。写真銅版を雑誌に導入する試みとしては、これが我が国最初の例であったという。多色刷りの口絵を毎号掲載したことも、当時としては思い切った試みであった。

なかでも、第2年第24号<sup>32</sup>は気球乗りに取材し、「風船乗実況図」（小林清親・画）である。後年、研堂は『讀物明治事物起原』下巻<sup>33</sup>に「明治二十三年、英人スペンサー氏、横浜にて風船乗を興行し、十一月十二日、東京に上りて天覧に供し、同二十四日、上野博物館内の広場にて興行し、縦覧せしむ、索つ



きのまゝよく上昇の目的を達せり。」と、臨場感溢れる感慨を記述している。

それもそのはずで、「小国民」の記事「風船乗実見の記」<sup>34</sup>によると、好奇心旺盛な研堂は画家の小林清親を伴ってスペンサーの興行を見物に行っている。今日ならカメラマンを伴って取材に出かけるところを、報道写真のかわりに清親に口絵を依頼したのである。しかも、雑誌の発行の日付は興行の行われた日からわずか9日めにあたる。さらに、「小国民」のこの口絵には2種類の異なる絵柄の版が現存している。おそらく、最初の口絵が気に入らなかったため、重版のおりか何かに刷り直しをしたものであろう。話題性のある報道記事にビジュアルな口絵をつけて速報に心がけ、しかも一流の画家を起用した口絵を刷り直すことまでしている。こうしたこだわりぶりこそが、研堂の真骨頂であった。

また、1891（明24）年10月28日に、社主・高橋省三の出身地でもある岐阜県・愛知県一帯が大地震に見舞われた。このときの被害は、全壊焼失142,000戸、死者7,200人と伝えられている。

「少年園」でも、この年の第3巻第21号<sup>35</sup>を皮切りに、地震関係の記事を掲載した。第3巻第24号<sup>36</sup>には、投稿作文の課題に「震災地の人に贈る文」を出すなど、積極的にこの震災について取り上げている。

しかし、「小国民」の場合はさらに進んで、広く読者から義捐金を募る企画を立てた。同誌に「特別館告」<sup>37</sup>を繰り返し掲載して、「岐阜愛知両県下の、罹災小学校新築費用」として「一ト口金五銭以上」の寄附を呼びかけ、総額で200円を集めたという。

少額の義捐金をいちいち記帳し管理する手数は容易なことではないが、こうした手数料にかかる費用は総て学齢館が負担している。全く営利を離れ、児童書出版社が取り組んだ最初の本格的な社会事業であった。同時に、義捐金の目的は小学校再建の費用を喜捨することを通じて「教育勅語の聖旨を奉体する微志をつくす」<sup>38</sup>ことにあったことを忘れてはなるまい。地震の前年に発布された教育勅語の精神を体験的に学ぶことが企図されていた。適宜な義捐活動は「小国民」の信用を高めることにもなったのである。

ところが、第7年第1号<sup>39</sup>に掲載した記事「海軍の信号」が手旗信号を紹介していたため、軍機に触れるとして告発された。幸いにも裁判中に戦争が終結し法令自体が廃止されて事なきを得たものの、さらに追い打ちをかけるように、この年の第7年

第18号<sup>40</sup>に至って発行・発売禁止の処分を受けた。その理由は「嗚呼露国」と題する記事がいわゆる三国干渉に論及して当局の怒りを招いたためと言われる。この処分を機に、誌名を「少国民」に変更して改題第1号<sup>41</sup>を刊行したが、誌勢は衰退の一途をたどり、翌年には経営不振から経営権を北隆館に譲り渡すことになった。

なお、「幼年雑誌」<sup>42</sup>は、殆ど唯一「小国民」に対抗しうる雑誌であり、しかも版元の博文館は大資本を背景とする総合出版社であった。ところが、「小国民」との競争には意外に苦戦をしている。わずかに巖谷小波のお伽噺が好評であったが、博文館に関係の深い木村小舟をして「内容外観共に遥かに『小国民』の優れることは否み難い」<sup>43</sup>と言わしめるほどであった。その理由は博文館が発行する雑誌の種類があまりにも多く、間口を広げすぎたからである。そこで、博文館ではおりからの日清戦争の戦勝気運にのって、従来発行していた20数種の雑誌を「太陽」と「少年世界」の二大雑誌に整理・統合することにした。

かくして、「少年世界」<sup>44</sup>は、「日本之少年」「幼年雑誌」「学生筆戦場」「婦女雑誌」のほか「少年文学」「幼年玉手函」の二つの叢書を統合し、「日出新聞」（のち「京都新聞」）の小説記者をしていた小波を主筆に迎えて誕生した。この頃の児童雑誌の編集者はその雑誌の主要な寄稿家でもあった。スター編集記者が自ら執筆する創作やその他の記事が、雑誌の売り上げを大きく左右したのである。創刊号から小波のお伽噺や江見水蔭の冒険小説を始め、各種の論説・史伝・科学などを毎号掲載するようになると、さしもの「小国民」も新興の「少年世界」に圧倒された。こうして小波の主筆時代は以後22年間も続くことになった。

このように、「少年雑誌」の登場は、確固たる理念をもった主宰者による雑誌の経営から商業主義に基づく雑誌の経営へと、時代の趨勢が転換した、ということを意味している。博文館に代表される新しい経営形態の確立こそ、大正期に大衆児童雑誌が勃興するために欠かせない条件であった。

### 3. 大衆児童文学の成立

大正の児童文化は、善かれ悪しかれ、都市中間層をターゲットとした享乐的な商業主義の興隆と結びついていった。

この時代の文化的特徴は、マスメディアとニュー

メディアの台頭と普及にあった。すなわち、雑誌や単行本など印刷メディアの大量発行と大量消費、蓄音機・映画のニューメディアの普及と発達などである。マスメディアやニューメディアの台頭は、従来とは比べものにならない規模とスピードで各種の児童文化財の変化と普及を促進した。児童文学においても、こうした傾向の例外ではなかった。

大正の大衆児童文学の雑誌には、実業之日本社の「日本少年」<sup>45</sup>「小学男生」<sup>46</sup>「小学女生」<sup>47</sup>、大日本雄弁会講談社の「少年倶楽部」<sup>48</sup>「少女倶楽部」<sup>49</sup>、日本飛行研究会の「飛行少年」<sup>50</sup>などがある。

その中でも「日本少年」こそは、大資本を背景にした商業主義に基づく新しい経営形態の申し子であり、かつ、その劈頭を飾るにふさわしい大衆少年雑誌であった。

初代主筆（今日の編集長にあたる）の星野水裏と第二代主筆の石塚月亭の時代は強力なライバル誌「少年世界」と競いあった草創期であり、第三代主筆の滝沢素水の時代が大衆児童文学誌としてのビジネスモデルを確立した躍進期である。素水が主筆になってからの誌面は、少年小説・冒険小説や、冒険的な色彩の強いノンフィクション・伝記ものを中心に構成に変容し、著しく売り上げを増やすようになる。

1911（明44）年1月号は、主筆となった素水が最初に迎えた正月号で、初版12万部を発行するも、たちまち売り切れとなった。翌年の1月号には15万部にまで達した。さらに、翌年の1913（大2）年1月号は、素水から有本芳水が主筆を引き継いだ最初の号で、発行部数は25万部にのぼった。1919（大8）年1月号は芳水が主筆として編集に携わった最後の年の正月号で、35万部を売り尽くしている。

この頃、後発の「少年倶楽部」もまた発行部数を伸ばしている。加藤謙一の『少年倶楽部時代』<sup>51</sup>によると、1921（大10）年1月号で6万部、翌年1月号が8万部、1924（大3）年1月号は飛躍的に増大して30万部と、「日本少年」には及ばないまでも経営は順調であった。

とはいえ、雑誌の新年号というものは、通常号よりもかなり多めに発行されるものである。

1921（大10）年に松山思水が第五代主筆に就任した際の「御挨拶」<sup>52</sup>には「愛読者十五万」云々という記述があるので、このあたりが通常号の実数とみるべきだろう。ただ、この当時の児童雑誌は1冊の雑誌を大勢の子どもたちの間で読み回しすることが普通であった。したがって、通常号で15万部売

れていたといっても、実際の読者数は発行部数を遙かに凌いでいたはずである。

このように、大衆の児童雑誌が驚異的な発行部数の増大を成し遂げた要因は、何よりも読者の興味関心をひく魅力的な読物や記事による誌面構成にあった。

例えば、日本で初めて飛行機が空を飛ぶと、飛行機に関するノンフィクション記事や物語を登場させる。第一次大戦が勃発するとドイツのスパイと闘う独探もの、海軍軍備制限条約が世間の関心を集めるとそれを批判した未来戦ものを登場させる、というような工夫である。芸術的児童雑誌においては、社会問題が取り上げることがあっても、象徴的に描く手法がとられていたこととは、まったく対照的であった。

さらに、巧みな大量宣伝、イベントや読者組織を通じた読者の動員、懸賞や会員制の叢書の発行など誌面を中心にした多角的な事業を展開した。こういった手法は大衆児童雑誌の基本的な経営戦略として、その後も長く引き継がれていくことになる。

なお、大正期には大衆児童文学でもなく、芸術児童雑誌でもない児童雑誌が出現している。

そのひとつは、学年別雑誌である。小学館ではまず手始めに、1922（大11）年に「小学六年生」<sup>53</sup>と「小学五年生」<sup>54</sup>を創刊し、1925（大14）年の「セウガク一年生」<sup>55</sup>に至るまで、順次、低学年むけの雑誌を描えていった。

もうひとつは、1924（大13）年に創刊<sup>56</sup>された「子供の科学」である。発行所は子供の科学社（のち誠文堂から誠文堂新光社に変更）で、科学読物の記事を中心に構成したこれまでにないユニークな雑誌であった。児童雑誌の中では最も歴史が古く、現在もなお刊行中である。

初代主幹（今日の編集長）の原田三夫は、新しい児童雑誌の目玉になる記事を求めて、中学の同窓生であった医学者の小酒井不木に執筆を依頼した。依頼を受けた小酒井は、欧米留学で身につけた最新の法医学や科学・化学の知識を活かして「少年科学探偵」シリーズを連載し、それらは『少年科学探偵』<sup>57</sup>にまとめられた。また、1927（昭2）年には、実業之日本社から松山思水を編集長（今日の副編集長）にむかえてSF小説を充実させるなど、知識読物ばかりでなく、創作読物にも力を入れた編集に特徴があった。

大衆児童文学の分野では、雑誌における大量発行と大量消費のビジネスモデルのみならず、書き下ろ

しの単行本においても同様のものが存在した。

すなわち、講談本といわれるジャンルのビジネスモデルである。

「立川文庫」<sup>58</sup>は、凡そ200冊にもものぼる小型本の大シリーズである。『諸国漫遊 水戸黄門』<sup>59</sup>や『たつかわ猿飛佐助』<sup>60</sup>など、多くのヒット作を出した。内容は大部分が実在・架空の英雄・豪傑・忍者がスーパーマン的な大活躍をするものである。荒唐無稽で奇想天外なストーリー展開に特徴があった。

講談本は「立川文庫」以前から存在したが、講談師が語る講談を速記者が書き留めて文章化していく手法をとっていた。だが、このシリーズでは速記の手法に頼らず、講談師出身の玉田玉秀齋とその家族が、最初から出版を目的とした専用のオリジナルな原稿を団体の共同作業で書き飛ばしていた、という。いわゆる書き講談と呼ばれるビジネスモデルの成立である。

定価は一応25銭であったがこれはあまり守られなかった。そのうえ、読み終えた本に5銭を添えると新しい本と交換してもらえる仕組みになっていたから、きわめて安価で本を読むことができた。こうして、興味本位のストーリー展開と廉価販売で青少年層の間に広く浸透したが、しだいに内容がマンネリズムに陥り、大手の大衆的児童文学系の出版社との競争に敗れていった。

立川文庫の凋落と入れ替わるように、大手の大衆児童文学系の出版社では、自社において大量発行している児童雑誌へ連載した長編読物を、連載の終了直後に単行本にまとめて刊行する、という新たなビジネスモデルを開発した。これらの単行本は、すでに連載中から人気を集めていた読物であったから、発売前から相当部数の売り上げが見込めた。そのうえで、派手な大量宣伝で子どもたちの購買意欲を煽ったのである。こうして、ベストセラーを次々と世に送り出していった。「少年倶楽部」に連載された宮崎一雨『日米未来戦』<sup>61</sup>や、吉川英治『神州天馬俠』<sup>62</sup>などがそれである。

#### 4. 大衆児童文学の多様な展開

大正の大衆児童文学を概観しようとするならば、まず、その前史として押川春浪のデビュー作『たつかわ海底軍艦』<sup>63</sup>に関する記述から始められねばならない。

主人公の柳川青年は世界漫遊の旅にでていたが、思い立って旧友の浜島武文を訪ねる。浜島はイタリアに渡って貿易事業を興し、財を築いていた。浜島

は、ちょうど、息子の日出雄と妻の春枝を日本へ帰国させることにしていたので、柳川に旅行中の後見を依頼するが、柳川の一行が乗船していた船はインド洋で海賊に襲われ、沈められてしまった。

一方、桜木予備海軍大佐は、軍事上の大発明を完成させるため、37名の部下とともに日本を出帆して行方不明となっていた。実は、南海の無人島で海底軍艦を建造しているのである。柳川と日出雄は、奇跡的にこの軍人たちに救助され、彼等と行動をとることにする。

春枝夫人の方は、無事に救助され、夫のもとに帰ることができる。だが、行方不明となった日出雄と柳川は、既に死亡したものと思込む。そこで、夫妻は日出雄を記念して私財を投げうち、巡洋艦〈日の出〉を建造して、日本海軍に寄付することにした。春枝夫人の実兄にあたる松島海軍大佐は、虎髯大尉（本名＝轟大尉）らを率いて、欧州で〈日の出〉を引き取り、浜島夫妻を乗せて本国まで回送する任務につく。その途中、海賊の大艦隊の襲撃を受け、孤軍奮闘するが決着がつかない。このとき、桜木大佐が指揮する海底軍艦が出現し、さすがの海賊艦隊も全滅する。そして、日出雄と浜島夫妻は再会することができた。以上がこの物語の梗概である。

この物語は、ジュール・ヴェルヌの「海底二万哩」にヒントを受けたものと思われる。SF小説としては、海底軍艦の構造や推進力等の設定が稚拙であるという点が、従来から、弱点として指摘されているものの、実在の軍艦〈こげん欽傍〉が行方不明になった事件をも巧みに取り入れ、日露開戦を前にした社会状況もあって、たちまちベストセラーとなった。

春浪のこの物語が読者である子どもたちに与えた思想的な影響という面から見た評価については、佐藤忠男の「少年の理想主義」<sup>64</sup>における次の記述が正鵠を得ているであろう。

彼は、ヴェルヌの素朴な科学礼讃を、愛国主義・進出主義で全くぬりかえてしまった。ヴェルヌにおいては、人間のもつ無限の創造的可能性と、同時におそるべき破壊的な衝動とのシンボルであった「海底軍艦」や「空中軍艦」が、押川春浪にとっては、日本の帝国主義的な発展のための武器として描きなおされた。日清戦争後、日本は小国であるという認識の下に抑えられていた、西欧の帝国主義的な諸国に対する日本人の反感を、彼は、アジアの盟主日本、というイメージで強烈につき動かし、日清戦争後におとずれ



た平和主義的風潮を、子どもの世界からふきとばしたのだった。子どもは過激な発想には身をゆだねやすく、おとなが考えあぐねていることの先へ容易につっ走る。

春浪のもっとも親しい親友であり、春浪の海底軍艦ものの系譜を受け継いだ阿武天風は、児童文学史上、初めて日米間の未来戦争を描いた作家である。

もっとも早い時期のものは、「潜航艇夢物語」<sup>65</sup>であった。この物語中では、日本の潜航艇が〈オロンガポー軍港〉を攻撃することを夢想する場面があり、米国艦隊の拠点港への攻撃を夢想することによって、間接的に日米間の戦争を描いたのである。天風は次に「艦日米戦争夢物語」<sup>66</sup>を書き、続いて「時事小説 日米の危機」<sup>67</sup>を書いた。

これらの3つの物語の背景には、当時、米国内で高まりつつあった日本人移民排斥の動きへの反発ということがあるが、この時点では、まだ、日米間の戦争の可能性は現実的でなく、〈近未来戦小説〉というよりは〈夢想〉というべきであった。

宮崎一雨の「艦日米未来戦」<sup>68</sup>は大正十〇年十二月に日米戦争が勃発するという設定の本格的な近未来戦小説である。日本の国家とは別に日本の旧軍人らによって結成された秘密結社が、祖国日本の危ういところで援軍として潜航艇隊を出撃させ、太平洋に回航されてきた米国大西洋艦隊を全滅させる。このように、この物語は「艦奇譚海底軍艦」など押川春浪の一連の物語を強く意識している。

その後、阿武天風は「太陽は勝てり」<sup>69</sup>で、本格的に日米未来戦争を描いている。この物語では、2隻の空中軍艦が登場する。これは、押川春浪の海底軍艦を空中軍艦に置き換えた設定であろう。ただし、空中軍艦という発想自体は、必ずしも天風の発案ではなく、すでに明治末の「冒険世界」にあった。ジュール・ヴェルヌから直接に影響を受けたということも考えられる。

ここに掲げた一連の軍事冒険小説群は、やがて平田晋策の「昭和遊撃隊」<sup>70</sup>などに引き継がれることになる。

他方、わが国における成人を対象とした探偵小説流行の歴史は、まず、明治20年代の初め頃から始まる。この頃、黒岩涙香らの翻訳・翻案ものが大流行する現象が見られるようになった。まもなく、この流行への反動として、明治20年代中ごろから探偵実話の流行という現象が見られるようになり、これは大正10年代まで続く。伊藤秀雄によれば、明

治中頃に流行した探偵実話は、「犯人の生い立ちから説き起し、尋常一様でない経歴が主となって展開され、最後に探偵によって捕縛されるといった定型的な筋立のもの」が多い。これに対して、大正期には、「犯人そのものの動きよりも、探偵自身の活躍に主眼が置かれるものが現われ」<sup>71</sup>るようになったという。こうして、探偵小説の主流は、翻訳・翻案ものから探偵実話ものに移行していった。だが、「実話に実話なし」<sup>72</sup>と言われているように、実際には、かなり事実を潤色したり、探偵実話という名を借りた創作ものが多かったのである。

中島河太郎によると、黒岩涙香の後継作家たちの物語は「おおむね翻案か、犯罪読物に墮するものが多く、創作は振るわなかった。論理を主軸にするより、冒険奇譚を強く表面に押し出した春浪の冒険小説に移るとともに、対象は少年に限られてしまった」<sup>73</sup>という。

かくして、明治の末から大正の初めにかけて、子どもむけの探偵小説の分野には、注目すべき現象がみられるようになる。すなわち、押川春浪の晩年の物語には、探偵小説または探偵小説の要素を加味した冒険小説を多く見ることができるようになったのである。

春浪のデビュー作『艦奇譚海底軍艦』を読むと、すでにデビュー作から物語中に謎解きの要素が加味されていることがわかる。冒頭部分に謎の老女が登場し、出帆の延期を忠告すと、終末部分で老女の息子が海賊の仲間に入っていたことがわかって、その正体が明かされる。伊藤秀雄によると、「春浪の作風は冒険が主で探偵味は従になっていたが、一派を開いたというべきである」「従来の探偵小説に冒険趣味を加えたのは、春浪の独創といってよい」<sup>74</sup>と、春浪の評価が高い。

また、春浪は博文館の「冒険世界」の主筆として活躍し、後には博文館の首脳陣と対立して自ら「武侠世界」を起こしているが、自らも筆を取ってこれらの雑誌に多数の読物を掲載する一方、三津木春影・阿武天風など多くの作家を育てている。

春影は〈呉田博士〉ものにおいて、法医学ほかの科学知識を推理に応用し、大いに人気を集めることになる。のちに、横溝正史・江戸川乱歩・西田政治・甲賀三郎といった作家たちが、春影の物語を少年時代に愛読していたという回想を記している。

〈呉田博士〉ものとは、オースチン・フリーマンの物語を翻案したものである。最初の物語は、「艦奇譚科学的探偵奇譚」と題して、「冒険世界」の1909(明

42) 年6月号に掲載された。ここでは、ソーンダイクを〈櫛田〉、ジェルビスを〈斐衣氏〉、ストップホルドを〈捨野〉などと、置き換えられている。のち、単行本『鬮田博士 第二篇』<sup>75</sup>では「汽車中の殺人」と題して、舞台を日本に移すなど、もっと日本風に改められた。それでも、一読して翻案ものであることがわかる。そのため、春影の探偵小説には「外国物の翻案が多くその意味では、独創性に乏しく、少年小説史上に残る作品を作り出したとは云い難かった」<sup>76</sup>という評価がなされている。子どもむけ探偵小説の分野が本格的に開花するためには、大正期末になって佐川春風（森下雨村の別名）や小酒井不木といった作家たちが登場してくるのを待たねばならない。

なお、この時期に盛んになりはじめた文芸のジャンルに少女小説がある。大正の少女小説を代表する著作は吉屋信子の「花物語」であろう。これは「鈴蘭」<sup>77</sup>を手始めに短編連作形式で書き継がれた54編から成り立つ物語で、ミッションスクールの寄宿舎という閉ざされた世界を舞台に、女学生たちが花にまつわる悲しい思いを語り合うという内容の物語であった。独特の美文調の文体と、女性の人生では少女期こそが最も美しいと見る価値観のありように、理想主義的な児童読物がもてはやされた大正期らしさが認められる。

ところで、芸術児童文学の分野では、「赤い鳥」の創刊をきっかけに、童心を謡いあげた新しい文芸として童謡が産声を上げていた。「赤い鳥」の北原白秋・西条八十、「こども雑誌」の三木露風、「金の船」の野口雨情、「童話」の島木赤彦・西條八十、「お伽の世界」の山村暮鳥など、多彩な顔ぶれの童謡詩人が活躍して、一般の雑誌や新聞も競うように童謡を載せた。白秋・露風・八十らの童謡は当時全盛であった象徴詩の影響の下にあったし、赤彦の童謡は古代の歌謡の伝統、雨情の童謡は民謡の影響が根底にあって、百花繚乱の様相を呈している。

この動きに対抗するようにして、大衆児童文学の分野では、少年詩や少女詩と呼ばれた子どもむけの詩が登場した。すなわち、有本芳水の『芳水詩集』<sup>78</sup>における抒情詩や、児玉花外の『鬮少年の歌』<sup>79</sup>における叙事詩・熱血詩などで、彼らの活躍の舞台は「日本少年」「少年倶楽部」「飛行少年」のような大衆的児童文学の雑誌であった。初めは芸術児童文学の分野の詩人として出発した西條八十も、「少年倶楽部」「少女画報」に少年少女詩を、星野水裏が「少女の友」に少女の生活をリアルに描いた少女詩を寄

稿している。

少年詩や少女詩が、童心という理想主義的な心性にむけた詩ではなく、現実に存在する子ども読者の心性に語りかける詩であったことは、大衆児童文学の分野からの重要な提起であった。

ほかに、成功立志談・孝女もの・滑稽ものなどもあって、大衆児童文学の作品内容は実に多彩で多岐にわたっている。

## 5. 大正の大衆児童文学の終焉

明治を代表する児童雑誌「小国民」は多色刷の口絵を売り物にしていたが、大正の「日本少年」もこの路線を継承したばかりでなく表紙についても多色刷とした。のちには本文記事中の挿画まで多色刷にすることを試みている。

川端龍子・竹久夢二・佐々木林風・細木原青起・池部均などの一流画家を起用したほか、創刊20周年めにあたる1926（大15）年には当時絶大な人気であった高島華宵を「少年倶楽部」から引き抜いて専属契約を結んだ。

その結果、「少年倶楽部」はたちまち売り上げが激減し、一時的に苦境に立たされることになった。これが、いわゆる華宵事件である。

しかし、「少年倶楽部」ではこの苦境を逆手にとり、誌面構成を読物に重点を置く方向に切り替えて、新人作家や子どもむけの読物に手を染めていなかった作家たちを発掘・起用することに努めて成功した。この事件こそ、口絵や挿画を売り物に部数の伸長をはかる「小国民」以来長く続いたビジネスモデルが、講談社が開拓した新しいビジネスモデルの前に敗北した、ということの意味している。

また、日本の児童雑誌は伝統的にスター編集者がその雑誌の主要な執筆者を兼ねるといったビジネスモデルによって運営されてきた。「少年園」の山縣悌三郎、「小国民」の石井研堂、「少年世界」の巖谷小波など、このようなビジネスモデルは明治から続く伝統的な方法であった。大正の覇者「日本少年」も同様である。ただ、滝沢素水・有本芳水・松山思水と、才能のあるスター編集者が続くうちはそれで良かったが、人事異動によって彼らは大衆児童文学の分野から遠ざかってしまう。それとともに、「日本少年」は凋落の一途をたどることになる。

ある時期に子どもむけの創作を多く書いて作家としての才能を開花させながら、出版社内の移動によってその分野から遠ざかってしまう現象は、ス



ター編集記者が雑誌の主要な執筆者を兼ねるとい  
う、古いビジネスモデルの抱える重大な矛盾である  
といえる。

そうした「日本少年」を尻目に、ライバル誌の「少  
年倶楽部」には編集者と執筆者の分業制という画期  
的なビジネスモデルが存在した。こうした新しいビ  
ジネスモデルを前にして、「日本少年」は必然的に  
敗北せざるをえない。

かくして、大衆児童文学雑誌の覇者は、旧来のビ  
ジネスモデルにとらわれていた「日本少年」から、  
新しいビジネスモデルを大胆に採用した「少年倶楽  
部」に交代していく。それは、紛れもなく時代の必  
然であった。

---

<sup>1</sup> 「愛子叢書」実業之日本社 1913（大2）年2月18  
日～1914（大3）年8月31日 全5冊

<sup>2</sup> 「模範家庭文庫」富山房 1915（大4）年12月5日  
～1938（昭13）年12月12日 全25冊

<sup>3</sup> 前期「赤い鳥」赤い鳥社 1918（大7）年7月号  
～1929（昭4）年3月号 後期「赤い鳥」赤い鳥社  
1931（昭6）年1月号～1936（昭11）年10月号

<sup>4</sup> 「おとぎの世界」文光堂 1919（大8）年4月号～  
1922（大11）年10月号

<sup>5</sup> 「こども雑誌」女子文壇社 1919（大8）年7月号  
～1920（大9）年7月号

<sup>6</sup> 「金の船」キンノツノ社 1919（大8）年11月号  
～1922（大11）年5月号、のち改題して「金の星」  
金の星社 1922（大11）年6月号～1929（昭4）年  
7月号

<sup>7</sup> 「童話」コドモ社 1920（大9）年4月号～1926（大  
15）年7月号

<sup>8</sup> 「子供之友」婦人之友社 1914（大3）年3月号～  
1943（昭18）年12月号

<sup>9</sup> 「コドモノクニ」東京社 1922（大11）年1月号～  
1944（昭19）年3月号

<sup>10</sup> 「大正日日新聞」1920（大9）年4月12日付

<sup>11</sup> 「赤い鳥」1920（大9）年9月号

<sup>12</sup> 「赤い鳥」1922（大11）年9月号

<sup>13</sup> 「赤い鳥」1920（大10）年8月号

<sup>14</sup> 宮沢賢治『注文の多い料理店』杜陵出版部 1924（大  
13）年12月1日

<sup>15</sup> 「童話」1925（大14）年10月号

<sup>16</sup> 「赤い鳥」1918（大7）年7月号

<sup>17</sup> 秋田雨雀『太陽と花園』序文 精華書院 1921（大  
10）年7月18日

<sup>18</sup> 「東京日日新聞」1926（大15）年5月13日付

<sup>19</sup> 註12に同じ

<sup>20</sup> 初出は「思想の科学」1959（昭34）年3月号。引  
用文は佐藤忠男『大衆文化の原像』（岩波書店 1993  
（平5）年1月18日）によった。

<sup>21</sup> 「少年園」少年園 1888（明21）年11月号～1895（明  
28）年4月号

<sup>22</sup> 「小国民」学齢館のち北隆館 1889（明22）年7月  
号～1902（明35）年12月号

<sup>23</sup> 木村小舟『少年文学史 明治篇』童話春秋社 1942  
（昭17）年7月10日

<sup>24</sup> 「小国民」1889（明22）年7月10日号

<sup>25</sup> 「小国民」1889（明22）年10月10日号

<sup>26</sup> 「小国民」1891（明24）年1月3日号

<sup>27</sup> 「小国民」1891（明24）年1月18日号

<sup>28</sup> 「小国民」1892（明25）年9月18日号

<sup>29</sup> 石井研堂『「小国民」綜覧』私家版 1941（昭16）  
年10月21日

<sup>30</sup> 「小国民」1890（明23）年1月10日号

<sup>31</sup> 「小国民」1891（明24）年8月3日号

<sup>32</sup> 「小国民」1890（明23）年12月3日号

<sup>33</sup> 石井研堂『讀明治事物起原』下巻 春陽堂 1944（昭  
19）年12月28日

<sup>34</sup> 註29に同じ

<sup>35</sup> 「小国民」1891（明24）年11月3日号

<sup>36</sup> 「小国民」1891（明24）年12月18日号

<sup>37</sup> 「小国民」1891（明24）年10月5日号

<sup>38</sup> 「特別館告」（「小国民」第3年第19号 1891（明  
24）年10月5日号）、第3年第22号（1891（明  
24）年11月18日号）などにも掲載

<sup>39</sup> 「小国民」1895（明32）年1月1日号

<sup>40</sup> 「小国民」1895（明28）年9月15日号

<sup>41</sup> 「少国民」1895（明28）年11月10日号

<sup>42</sup> 「幼年雑誌」1891（明24）年1月号～1894（明  
27）年12月号

<sup>43</sup> 註23に同じ

<sup>44</sup> 「少年世界」1895（明28）年1月号～1933（昭8）  
年1月号

<sup>45</sup> 「日本少年」1906（明39）年1月号～1938（昭  
13）年10月号

<sup>46</sup> 「小学男生」1919（大8）年10月号～1923（大  
12）年9月号

<sup>47</sup> 「小学女生」1919（大8）年10月号～1923（大  
12）年9月号

<sup>48</sup> 「少年倶楽部」1914（大3）年11月号～1962（昭  
37）年12月号（のち「少年クラブ」と改題）

<sup>49</sup> 「少女倶楽部」1923（大12）年1月号～1962（昭37）年12月号（のち「少女クラブ」と改題）  
<sup>50</sup> 「飛行少年」1915（大4）年1月号～終刊号不明  
<sup>51</sup> 加藤謙一『少年倶楽部時代』講談社1968（昭43）年9月28日  
<sup>52</sup> 「日本少年」1921（大10）年9月号  
<sup>53</sup> 「小学六年生」1922（大11）年10月号  
<sup>54</sup> 「小学五年生」1922（大11）年10月号  
<sup>55</sup> 「セウガク一年生」1925（大14）年4月号  
<sup>56</sup> 「子供の科学」1924（大13）年10月号  
<sup>57</sup> 小酒井不木『少年科学探偵』文苑閣1926（大15）年12月13日  
<sup>58</sup> 「立川文庫」立川文明堂1911（明44）年～最終刊行年不明  
<sup>59</sup> 加藤玉秀『諸国漫遊 水戸黄門』立川文明堂1911（明44）年4月15日  
<sup>60</sup> 雪花山人『義経三勇士猿飛佐助』立川文明堂1914（大3）年2月15日  
<sup>61</sup> 宮崎一雨『日米未来戦』大日本雄弁会1923（大12）年8月25日  
<sup>62</sup> 吉川英治『神州天馬侠』大日本雄弁会講談社1926（大15）年12月1日～1927（昭2）年10月15日  
<sup>63</sup> 押川春浪『機織海底軍艦』文武堂1900（明33）年11月15日  
<sup>64</sup> 註20に同じ  
<sup>65</sup> 「冒険世界」1908（明14）年5月号（激浪庵の名で掲載）  
<sup>66</sup> 「冒険世界」1910（明43）年4月臨増号「世界未来記」特集（虎髯大尉の名で掲載）  
<sup>67</sup> 「冒険世界」1910（明43）年5月号（髯の少尉の名で掲載）  
<sup>68</sup> 「少年倶楽部」1922（大11）年1月号～1923（大12）年2月号  
<sup>69</sup> 「少年倶楽部」1926（大15）年1月号～1927（昭2）年12月号  
<sup>70</sup> 「少年倶楽部」1934（昭9）年1月号～12月号  
<sup>71</sup> 伊藤秀雄『大正の探偵小説』三一書房1991（平3）年4月30日  
<sup>72</sup> 註71に同じ  
<sup>73</sup> 中島河太郎『少年小説大系』第7巻 三一書房1986（昭61）年6月30日  
<sup>74</sup> 註71に同じ  
<sup>75</sup> 三津木春影『機織呉田博士 第二篇』中興館1912（明45）年7月  
<sup>76</sup> 二上洋一『少年小説の系譜』幻影城1978（昭53）年2月25日

<sup>77</sup> 「少女画報」1918（大7）年7月号  
<sup>78</sup> 有本芳水『芳水詩集』実業之日本社1914（大3）年3月15日  
<sup>79</sup> 児玉花外『機織少年の歌』大同館1922（大11）年4月5日